

## **令和7年度第3回京都市市民参加推進フォーラム会議 摘録**

### **【開催日時】**

第1部：令和7年10月13日（月・祝）午前9時30分～午前10時15分

第2部：令和7年10月13日（月・祝）午後0時10分～午後 2時

### **【開催場所】**

京都市役所分庁舎4階 第6会議室

### **【議 題】**

第1部：

- (1) 次期市民参加推進計画及び地域コミュニティ活性化ビジョン等（以下「次期ビジョン」という）の作成について

第2部：

- (2) 次期ビジョンの作成について

### **【出席者】**

第1部：

12名

（乾座長、白水副座長、並木副座長、今里委員、岡田委員、竹田委員、中嶋委員、西澤委員、平井委員、平野委員、松井委員、水本委員）

第2部：

12名

（乾座長、白水副座長、並木副座長、岡田委員、竹田委員、千葉委員、中嶋委員、西澤委員、平井委員、平野委員、松井委員、水本委員）

※水本委員はオンライン参加

### **【議事内容】**

#### **1 開 会**

（局長あいさつ）

#### **2 議 題**

- (1) 次期市民参加推進計画及び地域コミュニティ活性化ビジョン等の作成について

＜事務局＞

（資料3・4に基づき説明）

＜今里委員＞

市政参加とまちづくり活動の両輪という説明があったが、次期ビジョンにおいても市政参加は横串として全ての施策に関わるものだと思う。施策のひとつとして記載はあるものの、横串を刺すようにはなっていない。市民意見を聴く場の事前意見でも、自分たちの意見を市政に活かしたいというものがあったので、市政参加に関して横串を刺すような記載ができないか。

<乾座長>

具体的にどのように盛り込むとよいか。

<今里委員>

現計画では、基本方針として市政参加が設定されている。次期ビジョンでは基本方針は設定しないと思うが、そのような全体にかかるような形で入れられないか。

<乾座長>

施策が具体的にねばなるほど、市政参加が見えにくくなっているのかもしれない。まちづくり活動で気付いたことを、どのように市政に反映するのかは重要な観点なので、継続検討したい。

<平井委員>

先ほどの意見と関連して、市民の意見を市政に反映させる役割のひとつが市会・府議会議員ではないか。これは市民参加推進のビジョンだから入っていないかもしれないが、議員との関係についても入れてもいいのではないか。

併せて、区役所がICT化を進めることにより人員を確保し、職員が更にまちづくりに参加していくという宣言に聞こえた。京都市の予算で実施していたまちづくり事業やイベントを市民が実施しようとした場合、京都市予算と同額を集めたとしても実施できない。それは、京都市予算には運営に関わっていた職員の人件費が含まれておらず、それを外注すると予算以上の金額が必要になるためである。ICT化が進んでも、例えば「活動の見える化」は、定期的な情報更新をしなければいけないため、事務局機能が必要であるが、ボランティアには限界があり、人件費を捻出することも含めて市民がどこまでできるのか。

<乾座長>

地方議会・議員との関係に関して、市政参加を問う市民アンケートに「陳情請願」についても入れてはどうかという意見をしたが、議会とは切り分けるという事務局判断で入らなかった。とはいえ、住民自治に関する活動と、地方議会や行政機関による団体自治への市政参加は一連でつながっている。第二部で継続して議論したい。

## (2) 次期ビジョンの作成について

<事務局>

(資料5・6に基づき説明)

**グループ対話：市民意見を聴く場を踏まえ、次期ビジョンの「目指す姿」と「施策」に盛り込むべき内容は。**

**(2グループに分かれて議論を行った後、全体で共有)**

<Aグループからの全体共有>

メンバー：並木副座長、岡田委員、中嶋委員、平野委員、松井委員、水本委員

(※水本委員はオンライン参加)

- 「不完全さ」「正解がない」というキーワードが重要ではないか。不完全さを埋め合うことに力を発揮していく。
- もっと学生の力を活かせるといいのではないか。学生の力を求めている地域や団体は

あるが、繋ぐ人がいない。さらには、繋がった後に継続していくための仕組みも考える必要がある。

- 市民意見を聴く場で話があった、行政職員が課題を背負い込んで病んでしまうのは大きな課題。職員にも余白は必要だろう。
- 全体イメージに関しては、京都市内のデザイン・アート系の学生を対象としたコンペを開催してはどうか。参加の余白を作ることになる。

#### <Bグループからの全体共有>

メンバー：白水副座長、竹田委員、千葉委員、西澤委員、平井委員

- 「良質な衝突が調和を生む」というキーワードが挙がった。活動が増えると衝突が起これることもあるが、そこから調和も生まれる。
- 全体イメージに関して、「上がっていく」表現はプレッシャーを感じるという意見があった。「広がり」や「ジャーニー」のような表現はどうか。
- 活動が続けていくためには「お金」も大事。どのように活動資金を集めるのか。
- 留学生や働いている人など、外国人は京都のまちの中で日常的に見かけるが、このビジョンの中にあまり出てきていないのではないか。

**全体対話：次期ビジョン素案の全体を通して、盛り込むべき内容は。**

<乾座長>

フォーラム第1部で出た「地方議会・議員との関係性」について、京都市はどのように考えているか。

<事務局>

市民の代表として行政のチェック機能を果たす市会を尊重しつつ、市民参加は、市民が直接的に市政に参加する機会として推進してきた。現行計画でも、両者の関係については触れられていない。市会からも市民参加をしっかりと進めていくことを求められている。

<乾座長>

参加の方法として、市会ルートと市民ルートの複線あり、元々は市会ルートのみであったが、それとは別に市民ルートも作ろうということで、市民参加推進計画を策定し、推進しているということである。

<平井委員>

市政参加で大事なのは、自分たちの身体を使って活動することだと理解した。

<乾座長>

市民が身体を使って活動して、見えてきたことを行政に伝えるのも重要である。

<平井委員>

市長は、市民に対して、いつでも区役所に来て欲しいと言っていたが、区役所の職員が地域に出て、市民の活動に参加し、意見を吸い上げていく形の方が良い。

<乾座長>

受けの結節点も、攻めの結節点もあるというご意見だと思う。行政と問題を共有して政策化していくことが、市政参加においては重要であろう。

#### <西澤委員>

市民意見を聴く場の参加者から熱量を感じた。普段から想いを持って活動しているからこそ、あれだけの言葉が出てくるのだと思う。彼らは結節点になりうる存在であり、彼らが活躍できる場をつくることが重要だと感じた。

#### <平井委員>

「不完全を共に埋める」というキーワードが良かった。京都ロータリークラブは、メンバーの3分の1が支店長で、数年ごとに異動していく。イベントを実施する際には、スタッフが少なくてもよい場合であったとしても、小さな役割を割り振り、たくさんのスタッフが関わることが重要である。役割がなければ参加しない者も、何か役割があれば出席して他の人と交流する。それが京都にいて良かったという体験につながる。

#### <平野委員>

市民意見を聴く場には、知っている人が多く参加していた。彼らを繋いでいくことで、ネットワークが広がっていくと思う。クエスチョンという場もあるし、繋げる人もいるので、上手く活かしていきたい。また次期ビジョンに、「不完全さ」というキーワードを盛り込んではどうかという意見が良いと思った。

#### <松井委員>

市民意見を聴く場を通じて、「不完全さ」というキーワードが気になった。活動を始める時は完璧だと思ってスタートするが、後で振り返ってみると不完全さに気付く。活動を継続することで、ちょっとずつ良くなっていくものではないか。

#### <岡田委員>

市民意見を聴く場の参加者は多様であり、京都のまちを良くしようとしている人がたくさんいることを感じた。一方で、どこにも所属しない人へのメッセージや巻き込み方が課題になる。

#### <竹田委員>

市民意見を聴く場の熱量が高く、あれが京都の魅力だと感じた。ただ、前進しているようで課題もあると思うので、色々な人が寄り集まって何かできるようになると良い。先ほどのグループ対話でも話に挙がったが、手段と目的を間違えると、居場所が政策化されて、そのパイを奪い合うようなことになるかもしれない。今日のような場があると、お互いの活動や想いを共有することができ、繋がりが生まれていくだろう。色々な利害関係を乗り越えていけるような場づくりや仕組みづくりを行っていきたい。

#### <千葉委員>

学生と外国人の存在は気になる。ファーストフード店でバイトリーダーをやっている学生に話を聞くと、バイトの9割は外国人。外国人は彼ら同士でかたまりやすく、ほったらかしになりやすい。大学の中でも、留学生と日本人が分かれがち。このような状況が長引くほど、交ざり合わなくなる。今日のような場にも、外国人に関する活動をする人が入ると良い。

#### <中嶋委員>

市民意見を聴く場からの学びは大きかった。あの場の熱量が伝わるような発信ができると良い。また、グループ対話を通じて、まちづくりは意外とハードルが低いと感じた。自分では意識していなかったが、昨年参加した学生政策コンペもまちづくりだし、子どもの通学を見守るのもまちづくり。まちづくりと言うと、活動を始めた人にフォーカスしがちだが、そ

れを繋いだり、活動に参加している人も担い手なのだと、市民の人たちに伝えていきたい。

<並木副座長>

市民意見を聴く場を通して、一人ひとりのまちづくりプレイヤーの方が持っている想いや課題を聞くことができた。参加者の皆さんからは、地域愛やテーマ愛などが溢れていた。このような愛が溢れてはみ出したところから、新しい仕組みや枠組みが生まれていくと思う。

全力で挑み続けることが、少しずつ地域を良くしていく。それを行政が受け止めてアップデートし、そこでまた市民が活躍する。それが繰り返されるといいのではないかな。次期ビジョンに盛り込みたい。今日はまちの中で活動している人が多かったが、自治会の存続自体が危うい地域もあると思うので、そのような地域の声も聴いて考えていきたい。

<白水副座長>

市民意見を聴く場は熱量が高く、あれこそが目指したい姿なのではないかな。グループ対話の中で、はじめは課題解決しようと集まった人々から、新たな課題や問いが生まれて、それにより新しい人が入ってくるという、「終わりのなきジャーニー」という言葉が出て、印象に残っている。その他にも「良質な衝突が新たな調和を生む」というキーワードも盛り込めるといいのではないかな。松井市長から、職員が一人で背負い込みがちという話があったが、行政の皆さんも抱え込んでいる部分を吐露して市民と一緒に揉み合って、話し合えるといいのではないかな。行政マンが背負い込まないようにするという観点も付け加えたい。

<水本委員>

小さな頃は、地蔵盆や運動会など、自然と地域の行事に参加する機会があった。それもまちづくりの一環だったのだと気付いた。年齢を重ねる中で参加しなくなり、それは忙しさやモチベーションの低下、京都の大学に通っていないからだと考えていたが、市民意見を聴く場を通じて、10分でも京都のまちづくりに関わっていこうと思った。オーバーツーリズムなど解決したい課題もあるが、その不完全さを魅力的なまちづくりに繋げていけないだろうか。

<乾座長>

今日の場合は、次期ビジョン策定に向けた素晴らしいプロセスになったのではないかな。このようにして作ったビジョンを、どのように形にして、続けていくのか。行政の力は不可欠だが、仕組み作りにおいては、今日のような話し合いの場を作れるといいのではないかな。平井委員の話にもあったが、外から京都にやってきた人をお客さんからプレイヤーにすることが大事だと思う。また、外国人の招き入れも大事。もともと京都は、色々な地域から人がやってきて創られた。新陳代謝をいかに生み出すか。社会が変わろうとする難しい時代にビジョンを作っているが、もう少し一緒に議論しながら形にしていきたい。

### 3 閉会

<事務局>

次回フォーラムでは、本日の意見を踏まえてブラッシュアップしたものに対して議論を行う。また、12月下旬以降にはパブリックコメントを予定している。市民参加推進のビジョンなので、できるだけたくさん意見がもらえるように、周りへの周知や、職員派遣による対話型パブコメの実施など、ぜひ協力をお願いしたい。

以上で、第3回会議を終了する。

以上